

主 題：沈黙の中で
聖書箇所：詩篇 28篇

テーマ：“神様が沈黙しているように思われる中で、どのようにして待ち望み続けるか”

今朝、皆さんとともに見ていきたいみことばは詩篇28篇です。まず、いつものようにみことばをお読みしたいと思います。

詩篇28篇 ダビデによる

「:1 【主】よ。私はあなたに呼ばわれます。私の岩よ。どうか私に耳を閉じないでください。私に口をつぐまれて、私が、穴に下る者と同じにされないように。:2 私の願いの声を聞いてください。私があなたに助けを叫び求めるとき。私の手をあなたの聖所の奥に向けて上げるとき。:3 どうか、悪者どもや不法を行う者どもといっしょに、私をかたづけしないでください。彼らは隣人と平和を語りながら、その心には悪があるのです。:4 彼らのすることと、彼らの行う悪にしたがって、彼らに報いてください。その手のしわざにしたがって彼らに報い、その仕打ちに報復してください。:5 彼らは、【主】のなさることもその御手のわざをも悟らないので、主は、彼らを打ちこわし、建て直さない。:6 ほむべきかな。【主】。まことに主は私の願いの声を聞かれた。:7 【主】は私の力、私の盾。私の心は主に抛り頼み、私は助けられた。それゆえ私の心はこおどりして喜び、私は歌をもって、主に感謝しよう。:8 【主】は、彼らの力。主は、その油そそがれた者の、救いのとりで。:9 どうか、御民を救ってください。あなたのものである民を祝福してください。どうか彼らの羊飼いとなって、いつまでも、彼らを携えて行ってください。」

さて、内容を考えていく前に、私たちが以前見た詩篇27篇が何を教えていたのかを思い出してみてください。それは主を待ち望むことでした。27:14にダビデは「待ち望め。【主】を。雄々しくあれ。心を強くせよ。待ち望め。【主】を。」と記していました。この詩篇を記したとき、著者であるダビデはひどい苦しみの中に置かれていました。具体的にどんな歴史的背景の中にいたのかはわかりませんが、彼は敵にいのちをねらわれ、恐れや不安で心が覆われても仕方のないような状況に置かれていたのです。しかし、そんな状況にあっても、ダビデは信頼する主の姿に心をとめて、主の助けを祈り求めていました。主が自分とともにおられるのなら、私はだれを恐れようと確信して主に抛り頼み続けていたのです。どんな困難に遭おうとも、信仰者は神様のうちに喜びや希望を見出すことができる。だからこそ、その方に信頼して待ち望み続けることが大切なのだと詩篇27篇を通してダビデは教えてくれていました。

さて、今回見る詩篇28篇は、その続きと言っても過言ではないのかもしれませんが。実を言うと多くの聖書注解者たちは、27篇と28篇の間にはさまざまな共通点があることから、この二つの詩篇が意図的に並べられていると考えています。例えばこの二つの詩篇の最初に、どちらにも「ダビデによる」という同じ表題がつけられていました。つまりこの二つの詩篇はどちらも著者がダビデだということです。また、著者が同じであるだけでなく、使われていることばにも似ている部分が幾つもありました。二つの詩篇を見比べると、まず28:1に「私の岩よ」ということばが用いられていて、27:5の最後の部分に「岩の上に私を上げてくださるからだ。」ということばが用いられています。どちらにも「岩」ということばが登場しています。また、28:2を見ていただくと、「私の手をあなたの聖所の奥に向けて上げるとき」と、ここに「聖所」という場所を表すことばが用いられていたのですけれども、27:4-5のところでも「【主】の家」や「幕屋」といった同じ場所を指すことばが用いられていました。それ以外にも、「とりで」や「救い」、「(ほめ)歌」といったことばがどちらにも使われています。

こういったさまざまな共通点が見られることから、多くの人はこれら二つの詩篇にはつながりがあると考えているのです。かつてあのスポルジョンも28篇に関して、自身の著書で「二七篇に続くこの位置は、意図されたものであるように思われる。この詩篇が二七篇の最もふさわしい補足であり、続編となっているからである。」と述べていました。こうしてこの二つの詩篇が密接に関係しているのであれば、主を待ち望むことの大切さを27篇で述べた後、ダビデは続きとなる28篇で一体何を語っていたのでしょうか？そのことを考える上で、1-2節を見ればすぐに様子がわかります。1-2節に「:1

【主】よ。私はあなたに呼びわります。私の岩よ。どうか私に耳を閉じないでください。私に口をつぐまれて、私が、穴に下る者と同じにされないように。:2 私の願いの声を聞いてください。」と書いていました。ダビデは神様に向かって変わらず声を上げ続けていたのです。27篇でも見たように、彼は助けを願い求めて主の働きを待ち続けていました。でも、状況はいまだに変わっていませんでした。むしろ変わらない状況を見たダビデは、神様が自分の叫び声に耳をふさいでしまって、祈りに答えてくれないかのように感じていました。彼はまるで神様が自分を見捨ててしまって、遠く離れてしまったかのような沈黙の中に置かれていたのです。もちろんダビデは、主を待ち望むことの大切さをよくわかっていました。でも助けを祈り求めても、もしいつまでも沈黙が続くならどうすべきなのか？神様からの答えを待ち続けている間、どのようにふるまうべきなのかがダビデには問われていたのです。

そしてそれは詩篇28篇を通して、今の私たちにも問われていることとなります。これは非常に大切なことです。私たちも前回、神様に信頼して待ち望むことの重要さとすばらしさを学びました。でも実際の悩みならどうでしょう？もしどれだけ熱心に祈りを捧げていたとしても、神様からの答えがいつまでも与えられなければ、果たして私たちはどのような態度をとるのでしょうか？悲しみや苦しみを主に打ち明けて助けを求めても、まるで主が遠く離れてしまったかのように感じるならどうでしょう？もし自分の苦しみがいつまでもそのままであったとすれば、果たして私たちは神様からの答えを忍耐をもって、待ち続けることができるのでしょうか？ダビデはその問いに対する答えをこの詩篇28篇を通して私たちに示してくれていました。彼はみこころにかなうことを追い求めるすばらしい信仰者でした。でも同時に、私たちと何ら変わる事のない弱さを覚えた罪人のひとりでした。そんなダビデが今を生きる私たちがそれにならって生きていくことができるように、ここに模範を残してくれていたのです。特にこの詩篇では、大きく三つダビデが残してくれていた祈りの模範を見て取ることができます。困難の中で主を待ち望み、祈り続けたダビデの模範です。この模範を今回ともに学んで、どんな状況にあらうとも揺るがされずに祈り続ける者として、ますます成長を目指していきましょう。このみことばが皆さんの励ましになることを心から祈っています。

○沈黙の中で：三つの祈りの姿勢

1. 我慢強く祈り続けること 1-2節

ダビデが残した一つの祈りの模範が1-2節に記されてきました。一つの模範は、我慢強く祈り続けることです。神様が祈りを聞いてくださらないように感じたとき、ダビデがまずしていたことは、変わらずに祈り続けることでした。1節から「:1 **【主】よ。私はあなたに呼びわります。私の岩よ。どうか私に耳を閉じないでください。私に口をつぐまれて、私が、穴に下る者と同じにされないように。:2 私の願いの声を聞いてください。私があなたに助けを呼び求めるとき。私の手をあなたの聖所の奥に向けて上げるとき。」**と記されています。ここで最初に注目してほしいのは、1節の後半、「私に口をつぐまれて、私が、穴に下る者と同じにされないように。」と訳されている部分です。実を言うと、このままではダビデがここで意図していることが余り伝わっていません。原文をそのまま訳すなら、こんなふうに言うことができます。「もしあなたが私に対して黙ったままなら、私は穴に下る者と同じになってしまうでしょう」と。「もしあなたが私に対して黙ったままなら」、言いかえれば、ダビデが神様に対して祈っていたのは一回きりのことではなかったということです。彼はもう既にある一定期間、何度も何度も神様に祈りをさ

さげていました。でも、その祈りに対する答えがいまだに出ていない、神様はずっと黙ったままなのだとダビデはここで打ち明けていたのです。

恐らく私たちが熱心に祈り続けようとするときに、それを妨げる一つの大きな問題となるのは「失望や落胆」かもしれません。何かしらの深刻な問題に直面したときに、私たちは神様に対して熱心に祈ろうとします。最初はいろいろな葛藤を覚えながらも、神様に抛り頼んで信頼して歩み続けようとするのです。でも一向に状況が変わらなければ、こんな思いが出てくるかもしれません。次第に、自分は何のために祈っているのだろうか、どんなに祈っていても、だれにも聞かれていないように感じるなら、このままでいいのだろうか、時間のむだになっていないだろうか、そんな気持ちに陥りそうになったこと、皆さんはないでしょうか？たとえ熱心に祈り続けようとしても、神様が遠く離れているように感じてしまって、心のうちに落胆が広がり始めてしまえば、熱心に祈ることが、待ち続けることが難しくなってくるのです。

●ダビデの持っていた二つの確信

でも、ダビデはそんな失望を覚えても仕方のないような状況の中で、変わらずに祈り続けていました。彼は落胆することなく、主を待ち続けていたのです。一体どうしてそんな態度を彼は取ることができたのでしょうか？少なくとも二つのことが言えます。

a) 神様だけが救いを与えることができる方だと信頼していたから

一つは、ダビデが、神様だけが救いを与えることのできるお方だと確信していたからです。確かに彼は神様が自分を無視しているかのように感じていました。だからそれによって苦しんでいました。でも同時に、彼はどんな状況になろうと、自分の信頼する主のご性質に疑いを抱くことはなかったのです。それが証拠に、この詩篇の最初でダビデは「【主】よ。私はあなたに呼ばわれます。私の岩よ。」と言っていました。ここで彼が用いていた「【主】」ということばは、もう何度もこれまでに見てきましたけれども、神様の個人的な名である“ヤハウエ”を指すことばでした。つまりダビデは自分と個人的な関係にある神様に対して、いつまでも変わることはない全知全能で、すべてを支配している主権者なる方、恵みとあわれみに富んだ偉大な神様に対して、自分の目を向けていたということです。また「私の岩」ということばも続いて出てきていましたけれども、これも神様が揺るがない守りであること、苦難のときの避け所であることを表していました。そんな神様の姿にダビデは変わらずに心をとめ続けていたということです。

ダビデは自分にとって必要な助けがどこにあるのかを決して忘れることはありませんでした。ここで私たちが覚えておきたいことがあります。それは、彼は自分の思いや置かれている状況によって、神様の姿を判断しようとはしていなかったということです。彼は今、自分に答えてくださらない神様の姿ではなく、今まで変わらずいつも誠実だった神様の姿に心をとめ続けていました。ダビデは過去を振り返りました。そしてどんなときも必要な助けを与えてくださり、守ってくださった神様が自分のことを見捨てることは決してないと確信していたのです。神様は決して変わらない誠実なお方だと。だから今答えがなかったとしても、必ず答えてくださる。神様だけが救いを与えることができるのだと、彼は信じ続けていたからこそ、落胆することなく祈り続けることができたのです。

b) 神様だけが唯一の希望だったから

そしてもう一つ理由を挙げるとするならば、ダビデにとってそんな偉大な神様だけが唯一の希望だと確信していました。彼は自分に十分な助けを与えることができるのは、ただ神様だけだということを知っていました。だからこそ彼は、もしあなたが私に対して黙ったままなら、私は穴に下る者と同じになってしまうでしょうと述べていました。ここで「穴に下る」ということばがありました。これも詩篇の中で何度も登場しているもので、墓や死を表すものでした。例えば詩篇30:3を見るとわかりやすいかと思いますが、そこにはこんなふうに使われています。「【主】よ。あなたは私のたましいをよみか

ら引き上げ、私が穴に下って行かないように、私を生かしておかれました。」と。ダビデがここで神様に訴えていたことは明白でした。彼は言うのです。「【主】よ」、もしあなたが今、私に耳を傾けてくださらないのであれば、何かをしてくださらないのであれば、私は死んでしまいますと。それほど死が間近に迫っていた彼の祈りは、緊急性を要するものでした。今すぐにでも助けを必要とするほど、彼は追い込まれていたのです。そんな中であっても、ダビデは自分の力や周りの者が自分の置かれている状況を変えることができるとは思っていませんでした。彼はその状況を変えることのできるお方が唯一神様だけなのだとわかっていました。だからその方に向かって熱心にあわれみを祈り求めたのです。ダビデにとって神様に拠り頼むこと、それはただ一つの選択でした。彼にはほかのプランはなかったのです。でも同時に、神様にさえ信頼して立つことができれば、どんなに激しい困難の中にあろうとも、揺るがされることはない。そこにあって希望を持つことができるのだと、彼は確信していました。だから彼は祈り続けることができました。

そして感謝なことに、今の私たちもこの同じ神様の姿を覚えて、我慢強く、忍耐強く祈り続けることができます。もしかしたら今、いろいろな困難を経験し、苦しみを覚えている方もおられるかもしれません。長い間、祈りをささげている中であって、心の中に悲しみや落胆が積み重なって失意を覚えている方もいるかもしれません。兄弟姉妹やだれかとの間に起こった問題について、祈り続けていても解決が見えなかったり、罪に対して勝利したいと強く祈り続けても、敗北を喫してしまったり。愛する家族の、また友人の救いを祈ることであったり、ほかにもからだのことや経済的なことなど、いろいろなことを神様に対してずっと祈っていたとしても、自分の目には何も変化が見えず、その中であきらめを覚えてしまっているかもしれません。神様は本当に私の声に耳を傾けてくださるのだろうか、不安や恐れを抱いている方がいるかもしれませんし、もしかしたら逆に自分の祈りが聞かれずに希望が見えないことで、神様に対して怒りや苦い思いを覚えているかもしれません。もしそんな思いを覚えている方がおられるのであれば、きょうのみことばが、ダビデが私たちに教えてくれることは、あきらめずに祈り続けなさいということでした。失望することなく、忍耐をもって待ち望み続けなさいと。

かつてイエス様もこんなことばをもって励ましを与えておられました。ルカ18：1-8に「：1 いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。：2 「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。：3 その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください』と言っていた。：4 彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、：5 どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない』と言った。：6 主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。：7 まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけなくて、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。：8 あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」とあります。ここでイエス様が言わんとしたことは明白でした。もし神様を恐れず、人に対しても人とも思わない、そんな不誠実で不正な裁判官がやもめの熱心さに根負けして、その訴えを聞き入れるのであれば、あわれみに富んだ神様はご自分のものが熱心に祈り求めるとき、その必要を必ず聞き入れてくださるのだと。

もちろんこれは祈れば何でも与えられるという話をしてしているわけではありません。でも、私たちがいつも覚えることができることは、神様は私たち以上に私たちに何が必要なのかをご存じだということです。そして、それだけでなく、それがいつ必要なのかも神様はご存じだということです。私たちには次の瞬間のこともわかりません。当然1週間後のこともわからないし、1カ月や1年後のことも私たちには到底わかりません。でも、それらすべてを知っておられる神様が、それらすべてを支配されている神様が、必要なときに必要なものを恵みによって、私たちに与えてくださると、主は約束してくださいま

した。だからこそ、私たちはこの方を信頼することができます。この方のことを待ち続けることが求められるのです。たとえいろいろな問題があったとしても、今その答えを見出すことができなかつたとしても、この偉大な神様がおられるのであれば、私たちは失望することなく祈り続けることができます。ですからダビデがそうだったように、この神様の姿を覚えて、我慢強く祈り続けること、これが一つ目にダビデが残してくれていた模範でした。

2. 主を拒む者の行く末を覚えて祈り続けること 3-5節

さて、ダビデはこうして自分にとって神様だけが救いであると覚えていました。ほかの何ものでもなく、唯一神様のうちに希望があると確信していたからこそ、変わらず神様に信頼しようとしたのです。私たちもその大切さをよくわかっています。でも、私たちが周りを見渡してみれば、時にそんな確信を揺るがすようなものがあふれていたりするのです。神様だけに心を向けて歩もうとしても、それ以外の何かに目を向けさせようとする誘惑もあるのです。では、そんな誘惑や難しさに対して私たちはどう向き合うべきなのか、ダビデはそのことにも関連して、続く3-5節で二つ目の模範を残してくれていました。3-5節に「:3 どうか、悪者どもや不法を行う者どもといっしょに、私をかたづけなさい。彼らは隣人と平和を語りながら、その心には悪があるのです。:4 彼らのすることと、彼らの行う悪にしたがって、彼らに報いてください。その手のしわざにしたがって彼らに報い、その仕打ちに報復してください。:5 彼らは、**【主】のなさることもその御手のわざをも悟らないので、主は、彼らを打ちこわし、建て直さない。**」と続いています。ダビデが残してくれていた二つ目の模範は、主を拒む者の行く末を覚えて祈り続けることでした。彼は我慢強く祈り続けていただけでなく、神様に逆らって生きている罪人がどんな結末をたどるのかに心をとめていたのです。

まず彼は3節に「どうか、悪者どもや不法を行う者どもといっしょに、私をかたづけなさい。」と口にしていました。ダビデがこのことばを発したとき、何も彼は自分が完璧な存在だと思っていたのではありません。もちろん彼は自分自身が罪人であること、神様の前に殺人や姦淫の罪などを犯した存在であることを理解していました。彼は自分の正しさというものを誇りになどいっさいしていなかったのです。彼は単に神様のあわれみを求めていました。本来であれば、今その者たちといっしょに私をかたづけなさいと願った悪者や不法を行う者と、自分自身が同じ立場の存在なのだというのを彼は覚えていました。もっと言えば、もし神様のあわれみがなかったとすれば、誘惑に負けてしまって、悪者たちと同じように悪を行ってしまう、そんな罪深さや弱さが自分にはあるとダビデは自覚していたのです。ダビデは自分自身が罪人であることもわかっていたし、自分自身のうちに間違ったこの世の考えや策略に負けてしまう弱さがあることもわかっていました。だから神様、どうか悪者といっしょに私をかたづけなさいと、神様のあわれみを求めていました。

そして、その後で実際にこの悪者たちがどんなことをするのかということについて、ダビデは3節の続きに、「**彼らは隣人と平和を語りながら、その心には悪があるのです**」と書いていました。彼らの姿が明白に書かれていました。この者たちは、口では人当たりの良いことばを語っているながら、その心のうちでは相手のことを傷つけようとしているような、そんな悪い思いを持っている存在でした。本人を前にしては優しいことばをかけながらも、裏では陰口やゴシップを用いてけなしているような、そういった人を欺く偽善者たちのことを表していました。もちろんダビデ自身は神様の前で喜ばれる者として歩み続けようとしていました。しかし、そんな彼の周りにはこういった心に悪意を持った人々があふれていたのです。ダビデはそういった悪者たちによって苦しめられていただけでなく、彼らの誘惑をも受けていたでしょう。神様に信頼し続けることにおいても葛藤を覚えていたでしょう。

少し立ち止まって考えてみてください。先ほど私たちが熱心に祈り続けていくことを妨げる一つの問題として失望や落胆というものがあることを考えました。それに加えて、もう一つ挙げるとしたら、それは「比較すること」と言えるかもしれません。比べることが私たちに問題をもたらすことも、私たち

はよく知っています。私たちが周りを見渡すときに、私たちは神様に逆らう者たちが自分たちの望むものを手にしている姿を見ることがあります。自分自身それぞれがずっと望んで祈り続けていたものを、ある人は何の問題もなく自分のものにしてている。そんな場面を目にすれば、私たちのうちにはその人々に対するねたみや嫉妬というものが生まれるかもしれません。そして、そうやってねたみを覚えてしまえば、神様に信頼し続けることがより難しくなるのです。なぜかというと、ねたみを覚えてしまえば、こんな問いを自分に投げかけるかもしれません。どうして神様はこんなにも祈っている自分には与えてくださらないのだろう、どうしてあの人には手に入って、私が求めているものは手に入らないんだろうと。神様の前に喜ばれることをして、自分こそ良いものを手にするべきではないだろうか、そういった間違っただ思いが心の中に浮かんでくるかもしれません。そして、そういった思いがどんどん広がってくれば、もし神様が私に与えてくださらないのであれば、周りの人と同じようなやり方をすればいいのではないか、聖書が言っていることも妥協して、そのまま続けていても何も手に入らないから、別に自分のやり方でやればいいのではないかと。忠実に神様に信頼し続けることが、本当に価値あることなのだろうか、こんな思いが私たちの心のうちに広がれば、当然、神様を待ち続けることに難しさを感じるようになってしまうでしょう。

ダビデも自分自身の弱さをよくわかっていました。だからこそ、彼は主を拒む者たちの行く末を覚えていたのです。4-5節に「:4 彼らのすることと、彼らの行う悪にしたがって、彼らに報いてください。その手のしわざにしたがって彼らに報い、その仕打ちに報復してください。:5 彼らは、【主】のなさることもその御手のわざをも悟らないので、主は、彼らを打ちこわし、建て直さない。」と書いてありました。ダビデはここで悪者たちに対して神様が報いを与えてくださるようにと祈っていました。彼らの行う悪をさばいてくれるようにと求めていたのです。ある人はこんな祈りを聞けば、ダビデは間違っているのではないかと、疑問を抱くかもしれません。なぜならかつてイエス様はさばいてはいけません、自分の敵を愛して迫害する者のために祈いなさいと言われていました。だからこの祈りは正しくないのではないかと。もちろんある点においてはそのとおりです。みことばは私たちが自分の手で復讐してはいけないと繰り返し教えていました。パウロもローマ12:19ではっきりと言っています。「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」」と。ですから、確かに自分自身が復讐をすることが間違っているとみことばは教えていました。でも、ここで気づいてほしいことは、ダビデは何もここで自分の正しさを訴えるために、自分のための復讐を求めていたのではなかったということです。彼は自分勝手な思いから、自分がひどい扱いを受けたから、神様にやり返してくださいと求めていたのではありませんでした。

では、どんな根拠でこんな祈りをささげていたのかというと、「彼らは、【主】のなさることもその御手のわざをも悟らないので、主は、彼らを打ちこわし、建て直さない。」と5節にはっきりと書かれていました。どうして悪者に報いてくださいとダビデが祈っていたのかというと、彼らが主の御手がなさることに対して、それを受け入れようとしなければ、認めようとしなからでした。彼らが神様のすばらしいみわざをみずからの意思をもって拒むがゆえに、その間違っただふるまいに対して神様がふさわしい報いを与えてくださるようにと祈っていたのです。そしてこれが悪者の行く末でした。悪者はたとえ一時的には成功して繁栄することがあったとしても、最後には神様によって正しくさばかれるのだということがみことばによってはっきりと言われていたのです。どんなにこの世でうまくいっていたとしても、主に逆らう策略がいつまでも続くことはありませんでした。神様を認めない者たちの策略は、必ずさばかれる、そのような罪人は必ずさばかれると。思い返してみれば、ダビデだけでなくパウロもローマ1:20-21で同じことを述べていました。「:20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに

弁解の余地はないのです。:21 それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。」と。パウロもよくわかっていたのです。周りに存在する自然界を目にさえすれば、そのすべてを造られた神様の力や神性、この方がどれほど知恵を持ったお方であるのか、そのことははっきりと見て取ることができます。だれの目にも神様がおられることは明白なのだ。

ダビデやパウロも、聖書は一貫して神様のみわざである被造物、創造を通して神様の存在が明らかにされているということを教えていました。そして、この世界にあるすべてのものがそんな神様によって造られたからこそ、造られたものはみな生まれながらにこの方に仕え、この方に従って生きる責任を負っていたのです。私たちひとりひとは、この神様を心から愛して、この方のすばらしさをほめたたえるという目的を持って造られました。でも実際はどうでしょう？残念ながら、私たちはみんな造られた方の目的に従うのではなく、それに背いた歩みをするようになりました。明らかにされている神様の存在を否定して、その事実を受け入れようとはしませんでした。人はみんなはっきりと示されているものに対してふたをして、神様に従うことよりも自分の望むままに、自分のために生きていきたいと願うようになったのです。こうしてすべての人は創造主なる神様に逆らって罪を犯しました。だからこそ本来であれば私たちもみな例外なく、神様のみわざを悟らない、受け入れない罪人であったからこそ、聖い神様によってさばかれて当然の存在だったのです。主をみずから拒んだからこそ打ちこわされて建て直されることのない厳しい報いを、神様の正しいさばを受けてしかるべき存在でした。

そしてもしここで話が終わっていたら、私たちにいっさい希望はありませんでした。でも、感謝なこととここで話は終わらなかったのです。あわれみ深い神様は、神の御子である救い主イエス・キリストをこの地上に人として送って下さいました。この世界に誕生された救い主イエス・キリストは完全な人であり、また完全な神様であったからこそ、その生涯において一度も罪を犯すことなどありませんでした。この方はすべてにおいて、完璧な生涯を送られたのです。そしてそんな罪のいっさいなかったお方が私たちの代わりに十字架にかかって苦しみ死なれました。この方は何も間違ったことを、罪を犯されなかったからこそ死ぬ必要もなければ、ましてや十字架にかかって死ぬ必要など一つもありませんでした。でもこのいっさい罪のない完全な歩みをしたイエス様がみずから進んで十字架にかかって下さり、私たちの身代わりとなってくださったからこそ、その血を流して下さったからこそ私たちの罪は赦されたのです。本来であれば私たちが受けるべき罪の罰を、キリストはその身に負って、罪に対して燃え上がる神の怒りを耐え忍んで下さいました。神様の怒りは私やあなたの上に注がれるべきものでした。しかし、その怒りをキリストが十字架の上でなだめて下さったのです。イエス・キリストの十字架こそ、私たちにはどうすることもできなかった罪の問題を解決してくれる唯一のものでした。これが、神様が私たちに示して下さった偉大な愛だったのです。

ですから、私たちは神様がなされた創造の中に、すばらしい神様の御手のわざを見ることが出来ます。被造物を見渡してみれば、そこに神様の姿を見て取ることができます。でも同時に、私たちがあの十字架を思い出せば、この救いのみわざのうちにこそ神様の聖さや神様の愛、神様のすばらしい救いのみわざをはっきりと見て取ることができるのです。だれにもわかるほど明らかに、そこに神様のみわざは示されているのです。そしてもしこれほどまでに主の偉大なわざが明らかにされているにもかかわらず、それを無視するのであれば、その者に待っているのは言い訳することができない神様からの永遠のさばきだとみことばは教えています。明らかにされていることに対して、みずからそれを拒むのであれば、その者にはそれにふさわしい報いが待っている。だからこそ、もしまだこの中に、救いを自分のものとされていない方がおられるのであれば、きょうこのイエス・キリスト前にへりくだって出て、この方を自分の救い主として受け入れてください。神様は心から悔い改めてご自分のもとに来る者を喜んで

受け入れてくださると約束してくださっています。ですから、救い主を信じて、この方のためにすべてをささげる生き方をきょうから始めてください。

兄弟姉妹の皆さん、こうしてダビデは沈黙の中であって、揺るがされることなく我慢強く、主を拒む者たちの行く末を覚えて祈り続けていました。彼は間違った者たちがどのような結末をたどるのかを覚えていたからこそ、一時的な喜びやこの世がもたらす満足に惑わされることはありませんでした。そのようなものにだまされることはありませんでした。私たちも同じです。確かにいろいろな誘惑は周りにあふれています。だからこそ何が永遠に価値あるものなのかということを、私たちはいつも考えることです。私たちはもう既に大きな犠牲を払ったイエス・キリストによって買い取られました。救い主に仕えて、神様に仕えて生きて行くことができる、すばらしい特権にあずかったのです。この方を私たちは待ち望み続けることができます。だとすれば、この主を覚え続けることです。ダビデは神様が自分を無視しているかのように感じて苦しんでいました。でも変わらず神様の姿を覚えて確信を置いていたのです。私たちも同じように歩むことができます。

3. 感謝を分かち合いながら祈り続けること 6-9節

そして三つ目にダビデが残していた模範は、感謝を分かち合いながら祈り続けることでした。6-9節で「:6 ほむべきかな。【主】。まことに主は私の願いの声を聞かれた。:7 【主】は私の力、私の盾。私の心は主に抛り頼み、私は助けられた。それゆえ私の心はこおどりして喜び、私は歌をもって、主に感謝しよう。:8 【主】は、彼らの力。主は、その油そそがれた者の、救いのとりで。:9 どうか、御民を救ってください。あなたのものである民を祝福してください。どうか彼らの羊飼いとなって、いつまでも、彼らを携えて行ってください。」と記されています。6節からこの詩篇の雰囲気は一変していました。沈黙の中で苦しんで助けを祈り求めていたダビデでしたけれども、それが変わったのです。一体彼の身に何があったのでしょうか？「まことに主は私の願いの声を聞かれた」と、6節にはっきりと記されていました。ダビデの叫びの声を主が遂に聞かれたということでした。1-2節に捧げていた自分の祈りを、願いの声を聞いてくださいという訴えに対して、神様が沈黙を破ってこたえられたのだと、ダビデは確信したのです。実際にこのとき、ダビデの状況がもう既に変わっていたのかは記されていないので、私たちにはわかりません。9節に「どうか、御民を救ってください」という祈りがあるからこそ、変わらず救いを願っていたからこそ、彼の置かれていた周りの状況は相変わらずだったのかもしれませんが。しかし状況はどうであれ、大きく変わったことがありました。それはダビデの心の状態でした。神様が遠く離れているように感じていたときに抱いていた葛藤や苦しみ、悲しみ、そういったものが取り除かれて、彼の心のうちには大きな平安が与えられていたのです。そしてそれはダビデが変わらずに神様の姿を覚え、信頼し続けていたから手にすることができました。

7節に「【主】は私の力、私の盾。私の心は主に抛り頼み、私は助けられた。」と書いています。ここでもダビデは主がどんなお方なのかを覚えていました。ダビデは主こそが自分にとっての力の源なのだ、主こそが盾なのだ、主が自分にとっての守りの源であることを忘れてはいませんでした。そして、そんな存在に自分の身をすべて委ねていたからこそ、たとえ状況は変わらなかったとしても、ダビデは希望を見出すことができたのです。そして、あわれみによって自分に答えてくださった神様に対して、ダビデはどんなふうに応答していたかという、7節に、彼はこおどりして喜んで、歌をもって神様に感謝を捧げたと書いてあります。祈りが聞かれたことに対して、彼は喜び勇んで神様に心からの賛美を捧げていました。それがふさわしい態度でした。私たちにとってもそれはふさわしい態度です。

でも時に、私たちは神様に感謝することを怠ってしまったり、忘れてしまうことがあるかもしれません。イエス様がツアラアトに犯された10人の人を癒されたときの様子が、ルカ17:15-18に「:15 そのうちのひとり、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、:16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であった。:17 そこでイエスは言われた。「十

人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。:18 神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」と記されていました。この話を聞けば、どうして9人は感謝をささげなかったのだろうかと多くの人は思うかもしれません。でも私たちが問わなければいけないのは、私たち自身がどれだけ必要を与えてくださった神様に対して目を向けて、その方にふさわしい感謝をささげ続けているかということです。考えてみてください。果たして私たちは与えられたものと、それを与えてくださったお方と、どちらにより感謝しているのでしょうか？どちらを喜びとしているのでしょうか？もちろん、私たちはどちらも喜ぶことができます。でも、私たちの心はそれを与えてくださったお方にいつも向いているのでしょうか？その方に心からの賛美をささげているのでしょうか？ダビデは自分に必要な助けがどこから来るのかを忘れてはいませんでした。だからこそ、それが与えられたときに、その祈りが聞かれたときに、神様に向かって喜びにあふれ、感謝をささげていたのです。

でも同時に、彼の感謝は自分ひとりで終わってはいませんでした。彼は自分だけが感謝して、それで終わったのではなかったのです。彼は自分だけではなくて、同じ神様の民に対してもそれを分かち合っていました。8-9節に「:8 【主】は、彼らの力。主は、その油そそがれた者の、救いのとりで。:9 どうか、御民を救ってください。あなたのものである民を祝福してください。どうか彼らの羊飼いとなって、いつまでも、彼らを携えて行ってください。」と記されています。「油そそがれた者」というのは、イスラエルの王として油注がれたダビデが自分自身のことを指すために用いていました。ダビデにとって力であり、救いのとりでであった主は、「彼ら」、つまり同じように神様を愛している者たちにとっても力であったのです。そして、そんな人たちのためにダビデは救いや祝福、主の守りと導きを祈り求めています。彼は自分の味わっていた喜びや感謝をただ自分のうちにとどめていたのではなかったのです。それでいいとも思っていませんでした。彼は感謝や喜びをほかの人とも分かち合おうとしていました。

そのことを踏まえた上で、ダビデが9節で「どうか彼らの羊飼いとなって、いつまでも、彼らを携えて行ってください。」と言ったとき、「羊飼い」ということばを用いているのは、非常に興味深いと思いませんか？なぜならダビデは詩篇23篇で、主が自分の羊飼いであることのすばらしさを賛美していました。感謝していました。良い羊飼いである主がいつも自分とともにいてくだされば、決して乏しくないということ、死の危険を伴うようなことがあろうともいっさい恐れる必要がないということを彼自身がだれよりもわかっていたのです。でも彼はその自分の羊飼いが、そのすばらしい主が自分だけのものではなくて、周りの人々にも同じなのだということ、周りの人々のためにもそのことを祈って、その主のすばらしさを人々とも分かち合おうとしていました。

今の私たちも同じです。私たちもそれぞれの歩みの中であって、主のなされた働きを感謝することができます。喜ぶことができます。でも、自分のうちにとどめるのではなく、それを兄弟姉妹と分かち合うことができます。神様がどれほどすばらしいお方なのかということを互いに思い出させ合って、祈り合うことができます。そうやって励まし合うことができるのです。沈黙の中で苦しんでいたダビデはほかのだれでもない神様に信頼して、その方がこたえてくださったことに対して自分が喜び、感謝しただけでなく、それをほかの人々とも分かち合いながら、続けて祈っていました。こうして感謝を分かち合いながら祈り続けていくこと、それがダビデが残してくれた三つ目の模範でした。

〇まとめ

さて、今朝、私たちは神様が沈黙しているように思われるような状況に置かれたとき、どのようにして、その中で待ち続けるのかということを考えてきました。どうだったでしょう？ダビデは私たちに我慢強く、主を拒む者の行く末を覚えて、感謝を分かち合いながら祈り続けていくことの大切さを、模範を通して示してくれました。もしかしたら今、皆さんの中に神様が自分から遠く離れてしまっているかのように感じている人もいるかもしれません。この先、いろいろな問題や困難に直面する中であって、神様が一向に自分にこたえてくださらないという場面に私たちは出くわすかもしれません。そのときは

きょう学んだこの詩篇28篇を思い出してください。そんなあなたと同じ状況に置かれていたダビデがどのようにふるまったのかを思い返してください。ダビデは、あきらめるのではなく、祈り続けることが大切なのだと教えてくれました。私たちの神様はご自分の子が叫ぶ声を必ず聞いてくださるお方です。そして、もし神様が沈黙しているかのように思えるとき、神様はその状況を用いて、私たちがますますキリストに似た者へと変わるために必要な訓練をなしてくださっているのだと覚えることができます。神様は、私たちにとって何が必要なのか、そしてそれがいつ必要なのかをご存じのあわれみ深いお方でした。神様はどんなときも変わることはありません。この方こそ私たちにとっての岩である存在です。だとすれば、この方を信頼して、主を待ち続ける者としてともに成長していきましょう。